

小熊英二研究会 最終レポート

総合政策学部 2年

石綿健造

学籍番号

71000516

ログイン名

s10051ki

2011年度春学期の小熊英二研究会において私は玄田有司氏の『仕事のなかの曖昧な不安』を発表担当書籍として選択し、発表した。今回の最終レポートにおいては、課題図書のとまとめと玄田有司氏の他の著作、さらには課題図書に対する他の有識者の批判などのまとめを行いたいと思う。(研究会履修前に提出した課題図書三冊のまとめのうちの一冊を私は発表図書とした。したがって、春休み中に提出した課題図書のとまとめと今回の最終レポートのとまとめは内容においてかなり重なる部分があることを御了承して頂きたい。)

まず著者の簡単な説明を行う。著者である玄田有史氏は主に若年者雇用問題や中高年のリストラ問題等の「雇用の喪失・創出」の観点から労働市場の分析を行い、日本における非正規雇用の存在と実態、そしてその構造的問題の分析を行ってきた人物である。ニートに関する審議会や勉強会の委員を務め、日本におけるニートのスペシャリストとしても知られる。近年では東京大学社会科学研究所のプロジェクトである希望学(希望の社会学)の主導者として、希望についての思想研究にも取り組んでいる。

以上に示した玄田氏の関心領域は代表的な著作からもうかがうことができる。研究会の課題図書であった『仕事のなかの曖昧な不安』では、90年代を通して高度経済成長期や、安定成長期と比べて激変した現代の日本の労働状況を、統計資料等を元に明らかにしようとしたものである。また、2004年に発表された『NEET—フリーターでも失業者でもなく』、2005年に発表された『子供がニートになったら』等からは、2000年代中盤から社会的に注目されるようになった「ニート(Not in Education, Employment or Training)」を取り上げ、マスコミなどによって人々の間に共有されている「ニート」のイメージと実際の「ニート」の現状とのギャップを明らかにした。また、最近の著作では2010年発表の『希望のつくり方』、『人間に格はない』がある。『希望のつくり方』では、労働状況や、若者の雇用状態等の研究から発展し、混沌とする現代社会において現代人が如何にして「希望」を獲得することができるかということについて述べられている。また、『人間に格はない』においては、2000年代における日本の労働状況を統計資料をもとに、示そうとしたものである。つまり、上の著作からいえるように、引き続き労働状況に関する現状解明の研究を行いながら、さらに人びとに「希望」を獲得させるための思想研究も行っているといえよう。

では、以下からは私が発表図書として選択した『仕事のなかの曖昧な不安』の内容をまとめていこうと思う。

「働く」ことには二つの不安がうずまいている。はっきりとした不安と、そして曖昧な

不安である。根底にある原因を明確に意識できるもの、それははっきりとした不安である。働くことに関して言えば、不良債権処理による大量失業、労働人口の減少、グローバル化による国際競争の激化、IT革命が象徴する技術進歩の脅威などがはっきりとした不安である。

一方で、何が原因なのか、いったい何がどうなるのか、よく分からないといった不安もある。それが曖昧な不安である。格差拡大、若年層の雇用問題、仕事に対する言いようのないストレス等である。そうした問題に関し、課題図書はデータを参照しながら、仕事に関する「曖昧な不安」に係る現状を客観的に示したものである。以下に具体的に示す。

#### ・失業率について

日本における失業者数は年々増加している。その数は2001年9月時点で357万人にもものぼる。そして、失業問題で注目されているのは「中高年ホワイトカラーの雇用不安」である。しかし、統計上のデータから考えれば、大学卒、大学院卒の失業者は全体の十数パーセントにすぎない。日本の失業者数の四人に三人は高校卒あるいは中学卒の人々である。若年者の雇用状況は、その多くが自発的失業といわれ、生計費の維持が難しい中高年像と比べて、問題が深刻視されることが少ない。しかし、若いうちに、仕事場で自身のスキルを高めることができない状況はゆゆしき問題である。熟練を通して高い生産性を実現してきた日本人の人的資源は劣化の道を進むことになるだろう。

また、そもそも問題は失業率だけにとどまらない。なぜなら、失業率の正確な意味は、毎月末の一週間に全く仕事をしておらず、職探しをしている人々、もしくは求職活動の結果を待っている人々が就業者数と完全失業者数の総和のなかで何パーセントを占めているか、である。したがって、職探しを諦めている人は含まれない。このような人々は「非労働力」という。一般的には非労働力というと学生や専業主婦、引退した高齢者をイメージするが、実際には失業者に限りなく近い、「職探しを諦めている人々」も含まれているのだ。

#### パラサイト・シングルについて

失業率や転職率の上昇の原因の一つに、「パラサイト・シングル」が挙げられる。パラサイト・シングルとは「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」とされている。このような人々は経済的困難に直面していないため高賃金の仕事を求める必要もなく、労働はいわば「趣味化」する。そのため、就職した仕事自分に向かないと感じればすぐに辞めてしまうのだ。しかし、パラサイト・シングルの増加が若年者の失業率・転職率の原因の大部分を担っているわけでは決してない。実際に若年層の雇用問題の原因の主たるものは高齢化した現存する正社員の「既得権益」を保持させるために、企業若年者の雇用機会が減少していることである。日本の企業における高齢化は確実に進んでいる。従業員1000人以上の大企業で働く男性フルタイム労働者のうち、45歳以上の占める割合は1990年の31%から2000年の37%へと上昇した。しかし、こうした中高年の過剰感や飽和感の中高年自身の大幅な雇用削減を生むというよりも、新卒採用を中心とし

た若年層雇用を大幅に抑制しているのだ。

#### ・フリーターについて

若者の雇用状況に関して話をするとき、フリーターについてふれないわけにはいかない。日本におけるフリーター人口は年々確実に増えてきている。1992年から1997年の間に50万人もフリーターが増えているのだ。フリーターの数が増えることで正社員になって厳しい環境の職場を避ける傾向が若者に蔓延すれば、ひいては日本の社会や経済に悪影響を及ぼすという懸念の声があがっている。

フリーターの数が増加した原因の一つとして若者の働く意欲の低下が挙げられる。しかし、多くのフリーターは実際には正社員として働く意思を持ちながら、正社員として雇ってもらえないという状況にいるのだ。それは、不況により新卒市場の環境が悪化していることが原因として挙げられる。また、たとえ、新卒として内定し正社員として働き出したとしてもその後会社をすぐに辞めてしまう場合も多い。なぜなら、不況により就職機会が少なくなれば、新卒者にとって自分の能力や価値観にあった仕事をなかなか見つけられなくなる。多く人は自分の第一希望の会社に就職することはできない。不本意な会社ではちょっとした不満やトラブルで転職を決意しやすくなるのだ。

フリーターの増加は単なる若者の働く意識の低下で済まされるものではない。また、フリーターといってもその状況は多種多様である。就職してもすぐに転職を繰り返すフリーター。親へ経済的に依存し、自立意識の低いフリーター。社会そのものと距離を置くフリーター等である。画一的なフリーター像を論じることは避けるべきだろう。

#### ・格差について

1990年代以降、日本における賃金格差の不平等化が進行しているか否かで論争が行われてきた。日本社会の不平等化が進んでいるという識者もいれば、そうでない識者もいる。しかし、統計上のデータを参照すると、1990年代前半と後半比較した際、同一の性別、年齢、学歴の階層内部における賃金格差は生じていない。むしろ、「賃金の画一化」とでも呼ぶべき格差の縮小傾向が生じているのである。格差の拡大が少なからずみられるのは30代後半から40代にさしかかっている大学卒の男性層のみである。背景には、この年齢層の大卒男性の多くが、成果主義的な賃金制度が導入されている大企業ホワイトカラーに属しているからである。しかし中高年大学卒の男子層を除くほとんどの階層では、成果主義やそれに伴う報酬格差は観察されない。格差や不平等について意識と実態にギャップがあるのはなぜだろうか。

原因の一つに成果主義の喧伝による不安が挙げられる。年功主義的な賃金・処遇制度のゆきづまりと、それに関わる人事制度としての成果主義の必要性が強調されている。成果主義の長示す通り、結果を出した人とそうでない人の間で処遇の格差が拡大するとなれば、よほどの地震にある人でなければ、新しい人事制度に緊張し、あるいは、不安を感じたり

するだろう。それが、格差に関する意識と実態のギャップにつながるのだ。

また、原因の一つとして仕事格差が挙げられる。同じ賃金をもらっていたとしても、一方が楽な仕事で、もう一方が辛い仕事であればそこに不平等感をもつだろう。それが、人々の思う「格差」につながる場合もある。実際に長時間労働する若者は増えている。その背景には不況により業務ノルマが高まった、採用抑制でかえって仕事量が増加したことなどがある。

#### ・成果主義について

成果主義導入をめぐっては、急速な経済構造の変化のなか早急な制度上の変革が必要とする意見と拙速な変更はこれまでつちかかってきた労使関係や能力開発システムを損なうとする意見が並存する。成果主義を導入したとき最も労働意欲が向上するのは成果主義を導入しながら同時に仕事の機能条件を見直しした職場であることが分かっている。仕事の機能条件の見直しとは、仕事量・労働時間・責任の増減、仕事内容・裁量範囲・役割分担の明確化、及び能力会い初の機会などについてははっきりと見直すことである。自分の能力がしっかりと評価される環境における成果主義の導入は好ましいものなのである。

さらに、能力開発の場をしっかりと設けることが成果主義の導入については重要であることもわかっている。成果主義とは短絡的、遅くとも中期的と期間を区切って、個々人の成果を問うものである。しかし、長期的な視点を持って、能力の開発機会を確保することが成果主義の成功につながるのだ。両者のバランスをとることが求められているのだ。

#### ・転職につて

転職する人はどんな人なのだろうか。60歳未満で、大学卒もしくは大学院卒の人々に注目、転職する人（以下転職者）と、転職しない人（以下定着者）で、仕事や家庭の状況にどのような違いがあうのだろうか。多くの調査結果から、転職者は定着者と比べて仕事試行が強くそれだけ不満もあるが、本当に希望する仕事をやりたい、自分の能力を長期にわたって発揮したい、と考えている人が多いことが分かっている。また、転職者は将来の自分の生き方や仕事に対し強い意識や計画性を定着者よりも持っていることも分かっている。一方、ライフイベント（結婚、出産、住宅取得）について、転職者よりも定着者のほうがなんらかの計画を立てている人が多い。以上のことから転職者の特徴を職業志向、定着者は生活志向もしくはライフイベント志向と区別することができるだろう。

また、幸せな転職をする際には、仕事場以外に、相談にのってくれる知人・友人が多いほう有利というデータもある。幅広い人間関係をもつことが転職には重要なのだ。

#### ・事業の独立について

仮に、若者の働く意識が変わったとしても、中高年の雇用を優遇する状況が変わらないかぎり、若年失業率の高止まりやフリーターの増加はなくなる。ほかの制度や環境が

変わらないまま、定年制度の延長や年齢差別の禁止などが導入された場合、中高年の雇用維持は進み、失業者やフリーターがますます増えていくだろう。

こうした状況を打開する策として、事業の独立が挙げられる。しかし、実情独立志向する若者は増加しているわけではない。独立を成功させるためにはそのタイミング等が重要だ。多くのデータから導き出されたことは、学卒後に40歳頃の独立を目標とするのがよいということだ。そして、40代での独立を視野に入れて、中小企業などで関連した仕事を行い、スキルを身につけることが重要である。そして、独立後は最初の1, 2年の厳しい経営時期を乗り切ることを目標に日々の生活を全うすることが必要なのだ。

以上が『仕事のなかの曖昧な不安』の内容である。とくにこの本で伝えたいこととして、90年代後半から社会的に注目されていた「中高年ホワイトカラー層の失業」は実際そこまで深刻ではなく、それよりも若年者の雇用問題のほうが危機的状況であるということである。本書の重要な論点として、若者の雇用問題の主たる原因として中高年労働者の既得権益の維持が掲げられている。しかし、著者は単に雇用問題について、世代対立を煽ろうとしたのではなく、若者の「曖昧な不安」を少しでも取り除き、事実をはっきりと認識したうえで、やみくもに頑張らず、仕事に対してクールに、冷静にファイトするための情報提供として本書は書かれているのだ。

最後に玄田氏に著作、あるいは論に対する識者からの批判を示したい。大阪経済法科大学講師である大野正和氏によれば、玄田氏は職業人口構造、失業率、労働時間、人事考課制度といった「客観的社会的条件」を詳しく解説するだけで、玄田氏自身がいう「ワケのわからない不確実性」や「曖昧模糊とした不安」そのもののリアルな姿についてはほとんど語られていないというのだ。若者の意識や態度を決めているものは一体何なのか。「人間の存在そのものにおける不安」＝「心の不安」がまったく本書のなかに見出せないらしいのだ。たとえば、ある若い女性労働者がいたとしよう。彼女は過去にパニック障害、父親の死、自殺未遂などの現代的な心の危機と苦しみをもっていた。しかし、彼女は好意を寄せる上司に「仕事を認めてもらいたく」、誰にも悩みを告白することなく必死に働き続ける。このような痛ましい心情を抱きつつ働く若者たちの姿は、現代日本の職場のリアルなあり方ともいえる。(各個人によって、深刻度に高低があったとしても)これは仕事という場を念頭においた「心の不安」＝「存在論的不安」として大野氏は捉える。労働問題の研究において「客観的社会」のあり方と「人間の存在そのもの」を両面から考察したものはあまりなく、つまり、可能なら「生活の不安」と「心の不安」を両面から考える必要があるというのだ。つまり、このような「心の不安」を考察する視点を本書に求める批判があるのだ。